



福岡医発第 772 号 (総)

平成 27 年 6 月 9 日

各 医 師 会 長 殿

福岡県医師会

会長 松 田 峻一良

(公印省略)

第 4 回「日本医師会 赤ひげ大賞」候補者推薦について

標記につきまして、日本医師会より推薦方依頼が参りました。

現在の日本では少子高齢化の波が急激に押し寄せてきており、従来の医療は疾病を中心とした医学・医療の進歩が求められて参りましたが、今後は、疾病も含みながら、患者の生活を中心におく医学・医療へと変わっていくものと考えられております。

そこで、本賞は「現役の赤ひげ」と言うべき、地域に根差した、地域住民の日々の健康管理と診療を親身になって行っている医師を顕彰すべく、「医師魂」をもって地域医療に貢献されている、原則 70 歳未満の現役医師を対象としており、今回 4 回目となります。

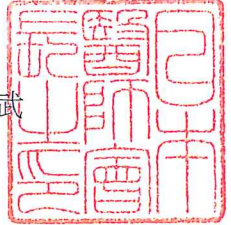
つきましては、別添要項に該当される方がおられましたら、候補者推薦書により来る 8 月 21 日 (金) までにご推薦いただきますようお願い申し上げます。該当者がいない場合もその旨ご連絡下さい。

日医発第206号（広情19）

平成27年5月25日

都道府県医師会長 殿

日本医師会
会長 横倉 義武



第4回「日本医師会 赤ひげ大賞」候補者推薦（依頼）について

拝啓 時下益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。日頃より会務運営に際し一方ならぬご高配を賜り、深く感謝申し上げます。

日本医師会では「現代の赤ひげ」と言うべき、地域に根差した「かかりつけ医」として、地域住民の日々の健康管理と診療を親身になって行っている医師を顕彰すべく、「日本医師会 赤ひげ大賞」を平成24年度に創設し、今般、第4回の候補者のご推薦をいただくことといたしました。

現役の医師で、病を診るだけでなく、地域に根付き、住民の健康の保持増進に貢献されている医師を対象としており、本賞が、そのような先生方の励みとなり、それぞれの地域で地域医療の充実にご尽力いただけることを願っております。

「大賞」受賞者は、各都道府県医師会長よりご推薦を頂いた候補者の中から、第三者も交えた選考委員会において選定させていただきます。

また、表彰式は、平成28年1月29日（金）を予定しております。

つきましては、貴医師会より別紙要領に従い、候補者をご推薦賜りますようお願い申し上げます。

敬具



推薦要領

【目的】地域の医療現場で長年にわたり、健康を中心に地域住民の生活を支えている医師にスポットを当て、その活躍を顕彰することで、各地の医療環境整備、医療活動の充実に寄与することを目的とする。

【主催】日本医師会 産経新聞社

【後援】厚生労働省（予定）、フジテレビジョン、BSフジ

【特別協賛】ジャパンワクチン株式会社

【表彰】都道府県医師会長から推薦された候補者の中から、日医役員を含む第三者を交えた選考委員会において受賞者5名を決定し、表彰を行う。受賞者には、賞状と記念品および副賞100万円を贈呈する。

【対象者】・病を診るだけでなく、地域に根付き、その地域のかかりつけ医として、生命の誕生から看取りまで、さまざまな場面で住民の疾病予防や健康の保持増進に努めている医師
・日医会員あるいは都道府県医師会員で現役の医師（但し、現職の日医・都道府県医師会役員は除く）
・原則として、70歳未満の方を優先

※過去の受賞者は、別紙または日医 (<http://www.med.or.jp/people/akahige/>) あるいは産経新聞の赤ひげ大賞 (<http://www.akahige-taishou.jp/>) のホームページをご参照ください。

【推薦方法】本賞受賞にふさわしいと思われる方（原則1名以上2名以内）を各都道府県医師会長が推薦

※本賞対象者として、過去に推薦された方の再推薦も可能です。

【提出期限】平成27年8月28日（金）

推薦書送付先：

〒113-8621 東京都文京区本駒込2-28-16

公益社団法人 日本医師会 広報・情報課（担当：田中、森田）

- ※ 「候補者推薦書」はパソコン、黒インク、黒ボールペン等ではっきり記入し、オリジナルを提出して下さい。ご応募いただいた書類は原則として返却致しませんのでご了承下さい。
- ※ 「候補者推薦書」に記載された個人情報に関しましては、本賞の選考や受賞者の報道関係への発表に使用することとし、それ以外の目的には利用いたしません。
- ※ 「候補者推薦書」はワードデータとして、文書管理システムに掲載しています。

なお、受賞者には、産経新聞紙上並びにBSフジの特別番組においてご紹介させて頂くことを申し添えます。また、被推薦者は、受賞のいかんにかかわらず、日医提供番組「赤ひげのいるまち」（BS-TBS）にご出演頂く可能性があります。

赤い表彰状

受賞者のご紹介（順列は北から）



まつだ よしと
松田 好人医師 (44)

北海道・名寄市
風通国民健康保険診療所

一人の医師体制のなか在宅医療の要として活躍

平成17年の着任以来、一人の医師体制で外来診療、在宅医療、ケアハウスや老人介護施設の入所者への訪問などを行いながら、特別養護老人ホームの嘱託医や学校保健医として、幅広く活動。

出勤する人のため、毎月1回朝7時からの早朝診療を実施。

平成19年に在宅療養支援診療所の指定を受け、必要があればいつでも往診に駆けつける。積み上げてきた確かな信頼により最後まで関わりを望まれ、これまで在宅25名、施設では年間40名を看取っている。



くろだ まこと
久藤 真医師 (66)

三重・久米内科

親子二代で地域医療を支える

親子2代にわたり地元で根付いた医療活動を続ける。父は津市空襲の時も疎開せずに診療を続け、戦後も自転車ですべて往診した。

認知症が強度な患者さんでも昔懐かしい旧制学校の事や軍隊の事、近所の建物などには強烈な印象があり、その人となりを知る契機として最適な話題となるため、普段から津市の古い地図や連隊史などを見て、往診時には旧制学校の記章、校歌の歌詞、昔の写真を入れている。

三重県の「血友病友の会」組織化に努め、顧問として指導、救済に尽力した。



よこて ひでよし
横手 英義医師 (60)

和歌山・横手クリニック

医療情報共有システムで“チーム在宅医療”

高齢化の進んだ過疎地域に開業し、個々で活躍する医師をまとめ、地域全体の住民の健康を守るために奮闘。ITを用いた医療情報共有システム“ゆめ病院”の開発に取り組んできた。本システムを地域の中核病院にも導入し、入退院時の病診連携にも利用している。

在宅医療でも、iPadを利用し、複数の医師、複数の訪問介護ステーションによるチーム在宅医療として応用。かかりつけ医の不在時でも、急変した在宅患者にチームの当番医が対応できるシステム“ゆめ在宅医療ネットワーク”を構築する等、地域医療の充実に大きく貢献した。



すずき つよし
鈴木 強医師 (67)

広島・鈴木クリニック

第2の医師人生を地域医療にささげる

医師になって以来「50歳になったら田舎で地域医療に携わる」との信念のもと、交通の便の非常に悪い山間過疎地域で開業。

地区唯一の医療機関であり、地区全体の生活に密着したドクターとして高齢化の進んだ地域住民の健康管理に多大な貢献。

冬季に急患が出た時には、40センチ以上の積雪の中を何時間もかけて往診に出かけるなど、過酷な環境の中、診療活動を続ける。

最近は近隣地区の開業医が減少し、重責が増している。



なかの しげのぶ
中野 俊彦医師 (69)

大分・直隼町中野診療所

患者住民に寄り添うかかりつけ医

無医村地区に診療所を開業し、365日24時間、あらゆる年齢層の診療を行い、救急対応や慢性疾患の継続管理にも取り組んでいる。

すべての患者を把握しているため、診察券はあえてつくっていない。

血圧、体重、散歩などを自分で測定して診察時に提出する「自己申告ノート」を普及させるなど、患者住民参加型医療を実践している。

「吉野ほたるを育てる会」の事務局を引き受けたり、農家の合鴨水稲同時作導入を手伝うなど、地域おこしにも尽力している。

2012年12月末現在

赤ひげ大賞

受賞者のご紹介（順列は北から）



しもだ けん
下田 憲 医師 (66)

北海道
けん三のこぼ館クリニック

広大な山間地域で24時間献身的な医療活動

空知郡 幾賀という医療資源の乏しい地域で開業し、近隣の老人ホームや障害者施設、保育園の担当医として活動するがたわら、広大な同地域内における往診にも積極的に対応してきた。

24時間献身的に医療活動を行うだけでなく、休日には同地域の老人ホームでアコーディオンを演奏するなど、まさに地域の健康・医療を支える医師と言える。



のむら りょういち
野村 良彦 医師 (67)

神奈川県
野村内科クリニック

都市部でも交通が不便な地域で幅広く患者のニーズに対応

三浦半島で最寄りの駅まで3kmという交通が不便な地域で開業し、外来診療から在宅診療まで「かかりつけ医」として幅広く患者のニーズに応え続けている医師。

在宅医療では、多岐にわたる疾病や障害を持つ1,000名余りを担当し、500名以上を看取っている。

また、市民活動として、がん患者を対象とした「がんなんでも相談」等を実施するなど、地域医療に多大な貢献をしている。



こばやし てるお
小鳥 輝男 医師 (68)

滋賀県
医療法人社団 小車医院

「患者よし・医療機関よし・地域よし」の「三方よし研究会」を設立

滋賀県東近江市保健所圏域において地域医療における「患者」「医療機関」「地域」の良好な関係を実現させるため、医師、看護師、薬剤師、理学療法士、歯科衛生士、健保職員等、立場の違う医療従事者の方々が毎月集う、「三方よし研究会」を設立。

終末期に自宅で医療や介護を受けるなど、患者さんにとって最善の方法を模索するためのコミュニケーションを実現している。



おお しの かほる
大岩 香苗 医師 (56)

兵庫県
医療法人 大誠会大岩診療所

患者・家族・母親目線で町民の心の支えに

「赤ひげ大賞」初の女性受賞者。

女性医師で外科医という大変貴重な存在として 上郡町約15,000人の地域医療を担うとともに、往診にも力を入れ、患者と家族の支えになっている。

また、地域の中学校の校医や上郡町の乳がん検診を一手に引き受けるだけでなく、町の取り組みにも積極的に協力するなど、高齢化率の高い同町において、障害者、高齢者の方が不安なく生活出来るよう地道な努力を続けている。



しろ いし よし たく
白石 吉彦 医師 (47)

島根県
隠岐広域連合立 隠岐島前病院

離島唯一の病院でチーム医療を実現し、住民から熱い信頼

隠岐諸島の有人4島のうち、島前と呼ばれる西ノ島、中ノ島、知夫里島の地域医療支援ブロック制の拠点となる「隠岐広域連合立 隠岐島前病院」に、院長として10年以上勤務。

人口約6,500人の当該地区における医療の中核としての役割を担っている。

離島における唯一の病院では、医療機器をフル活用して治療に当たっている他、同院のスタッフによるチーム医療も実現し、住民から熱い信頼を寄せられている。

2014年3月28日現在

赤い褒賞

受賞者のご紹介（順列は北から）



いわた ちかす
岩田 千尋 医師 (67)

岩手県
大槌病院

東日本大震災後の現在も全力で医療再建に尽力

38年間大槌町民および近隣住民の健康管理に貢献。東日本大震災の際には、被災した県立大槌病院において数日間にもわたる停電と断水の中で懸命に医療活動に従事するとともに、入院患者を安全な場所に移送すべく奔走した。大震災後、人口と共に医師数も減少したままの大槌市において、現在も仮設大槌病院で定年退職を延長し、全力で医療に取り組んでいる。



にしむら きょうこ
西嶋 公子 医師 (69)

東京都
西島医院

在宅医療に長年取り組む、地域のかかりつけ医

東京都町田市という新興住宅地をベースに、33年間、かかりつけ医として活躍。開業当初から在宅医療に力を注いできた先駆者。「住民の、住民による、住民のための在宅ケア」を目標に、地域住民と協働し、国、都、市に訴え、市有地に600坪の高齢者施設を建設。外来診療、往診だけでなく、院内カンファレンスや住民とのふれあいの場を設けるなど、積極的な活動を行っている。



きくuchi しげき
鬼頭 秀樹 医師 (60)

徳島県
上那賀病院

過疎地域に移住し、24時間年中無休で患者に対応

大阪・和泉市立病院の外科部長として活躍していたが、僻地医療に関心があり、那賀町で新設の手術施設が外科医不在のために活用されていない現状を知って家族と移住。院内手術数を4割増加させた。また、病院の近くに居住し、24時間年中無休で患者に対応し、重症患者の救命率を向上させたほか、平日来院できない勤労者や児童のため、日曜午前中にも外来や往診を行っている。



にしまた けいすけ
二ノ坂 保喜 医師 (63)

福岡県
にのさかクリニック

あるべき在宅医療・介護を目指し患者に寄り添う

「人生の最期は生活から切り離された病院ではなく、住み慣れた我が家で豊かな生活を過ごしてほしい」との思いで、足しげく患者宅に通い、患者やその家族とのふれあいを大切にしている。また、在宅医療への地域の理解を深めるために、在宅ホスピスのガイドブックを作成したほか、在宅介護を支えるボランティアの育成にも力を入れている。



きかわ せいし
古川 誠二 医師 (65)

鹿児島県
パナウル診療所

離島医療をライフワークに日々の実践を続ける

鹿児島県徳之島から始まり、今日まで、25年間に離島医療に従事。離島のプライマリ・ケアの実践を行っている。通常の診療のほか、往診は高齢者を中心に24時間対応で、不在の時は全国から集まる先生方に留守を頼み、日々対応できる体制を整えるだけでなく、島内で対応できない患者は、ヘリコプターや小型飛行機を利用し、島外に急患搬送を行っている。また、公民館で英会話教室を開くなど、島内の教育にも尽力している。

2014年10月31日現在